

中国中古以前の吃音（発話の非流暢性）への認識と 理解：「吃」「訥」を例に

栗山，雅央
中国鉱業大学人文与芸術学院：副教授

<https://doi.org/10.15017/7183030>

出版情報：中国文学論集. 52, pp.36-53, 2023-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



中国中古以前の吃音（発話の非流暢性）への認識と理解

——「吃」「訥」を例に——

栗 山 雅 央

一、中国学における「吃音」認識

一般に中国学の範疇において、現代医療の中で発達障害に位置づけられる「吃音」が研究の俎上に載せられることは少ない。しかし、これは中国にあつて吃音の症状を持つ者が存在しなかったことを意味するものではない。韓非子を初めに、司馬相如や揚雄、左思などがこれまでもこれに該当する人物として認識されてきた。¹⁾

非爲人口吃、不能道説、而善著書。

（韓）非の為人は口吃、説を道ふこと能はず、而も著書を善くす。

（『史記』卷六十三 韓非伝）

相如口吃而善著書。常有消渴病。

（司馬）相如は口吃にして而も著書を善くす。常に消渴の病有り。

（『漢書』卷五十七下 司馬相如伝下）

中国中古以前には吃音を「口吃」と一般に呼称し、これは現代中国語でも同様である（但し、「結巴」[jiéba]がより一般的）。韓非子（前二八〇?～前二三三）は吃音のため口頭での自説の開陳に難があったが、『韓非子』中の諸篇に明らかなように著述に秀でていた。司馬相如（前一七九～前一一八）も吃音の症状がありつつも賦の創作に優れ、吃音とは別に「消渴病（糖尿病）」も患っていたという。

筆者がここで敢えて彼らに触れたのは、こうした「吃音」を症状に持つ人物と「文章創作」との間にいかなる関わりがあったかという点に疑問を持ったためである。より直截に言えば、先に挙げた四人のうち、韓非子を除く三人が賦の名手として文学史に取り上げられ、また左思を外した三人が前漢以前に活動した（左思を含めたとしても西晋以前に限定される）が、こうした文体と活動時期の集中が何故に起こり得たのかという点が問題になると考えたためである。しかし、従来は吃音を初めとする発話に困難のある人々の時代毎の出現状況などが未整理であり、問題としてそもそも成立し得るのかはつきりしなかった。これについては史書や類書を中心にこうした人々を整理した結果、十分に考察するに値すると筆者は考えている。そこでこの問題に取り組む基礎段階として、本稿ではこうした症状を持つ人々がどれほど中国の歴史上に登場するかを整理し、中国中古以前の吃音を含む「発話の非流暢性」を持つ人々を対象にその状況について概略を示し、先の問題が成立するか否かの回答を示したい。

なお、現代医学における「吃音」とは、言葉をなめらかに発することのできない（非流暢性）発話障害のことを指す。その症状は、音の繰り返し（連発）、引き伸ばし（伸発）、言葉を出せずに間があいてしまう（ブロック・阻止・難発）に分類される。症状そのものも、発達性吃音と獲得性吃音の二種類に分類ができ、前者は幼児期に二語以上の複雑な言語を発話する段階で発症する場合が多く、体質や発達状況、環境などの要因が挙げられる。但し、その八割前後が自然治癒するとされる。一方、後者は神経学的疾患や脳損傷、心的外傷の原因として青年期以降での発症が多い。なお、現代医学の分類が中国においても通用する可能性があることは先に述べておく。

二、「発話の非流暢性」の指示範囲

そもそも中国中古の「発話の非流暢性」という概念に対し、現代医学の理解をそのまま当てはめることは少し難しいようである。先に韓非子と司馬相如を吃音者の例として挙げたが、韓非子はその「為人」が「口吃」であったと、個人の性質に吃音が含まれる。司馬相如もこうした側面が強く見える一方、「消渴病」と併置されるように「病」としても意識されたであろうことが窺える。こうした「発話の非流暢性」を示す語彙の範囲を定める必要があるが、

中国中古以前の吃音（発話の非流暢性）への認識と理解

吃音を含む発話が滑らかにいかない状態を形容する場合には、「吃」「訥」を用いることが多い。『説文解字』には「吃」とは「言蹇難也（言ふことの蹇難なり）」とあり、発話が自然にできない困難を意味し、同じく「訥」も「言難也（言ふことの難なり）」とあり、段玉裁注には後述の『論語』里仁篇の一節を引用するとともに、その包咸注に「訥、遲鈍也（訥は遅く鈍きなり）」と、これは発話速度の遅さを示している。「訥」は現在も「木訥」と言うように個人の性質と極めて接近した字であり、かつ発言の多寡の区別として用いられることも多く、先秦時期には孔子の言説の中に当時の「訥」理解が看取れる。まずは「訥」との比較として『論語』学而篇を挙げる。

子曰「巧言令色、鮮矣仁。」

子曰く「巧言令色、鮮し仁」と。

飾り立てた言葉や取り繕った表情をする者は仁に欠けると孔子が述べるが、ここでの「巧言」に相對するものとして同子路篇に次の例が見える。

剛毅木訥、近仁。

剛毅木訥は仁に近し。

意志が強く、飾り気がなく寡黙な者は仁に極めて近い位置にあると孔子は評す。仁を評価の基準に定めた上で「巧言」よりも「木訥」な性質を上位に挙げる。同様の傾向は同里仁篇にも確認できる。

君子欲訥於言、而敏於行。

君子は言に訥にして、行ひに敏ならんと欲す。

ここでは君子の在り方として、発言は慎重に行動は機敏にあれかしと説かれており、やはり「寡黙」的傾向が評価された上で「訥」が使われる。これらはあくまで「仁」という儒教的価値観を軸とした上での発話の多寡を問題にするが、発達障害に基づく口数の少なさや非流暢さを示す「訥」として使用された例も確認される。

思遂感激勤學、兼善陰陽之術。貌寢、口訥、而辭藻壯麗。不好交遊、惟以閑居爲事。

（左）思遂に感激して學に勤め、兼ねて陰陽の術を善くす。貌は寢ぐ、口は訥、而も辭藻は壯麗なり。交遊するを好まず、惟だ閑居を以て事と爲す。

(『晋書』卷九十二文苑 左思伝)

西晋の左思(二五三―三〇七)に対して「口訥」を用いるが、これは従来より吃音を示す字句として認識されている。このように障害として認識されることの多い「吃音」と、個人の性質として理解される「寡黙、木訥」といった口数の少なさを同列に並べて論じることについて疑問がないではない。しかし、中古以前の中国にあつては「吃音」は現在とは異なり明確に障害としてではなく、およそ実際に表に出てくる現象、ここでは「発話が非流暢であること」といった大枠の中で認識されていたようで、このことは先に『論語』に見た「訥於言」の用法の変化からも予想できる。『論語』里仁篇では「敏於行」と対置して、発言に慎重を期すという個人の性質や態度を意味したが、後世は同じく「訥於言」で現在の「吃音」に近い症状を示す場合も確認できるようになる。

摩訶訥於言、恂恂長者。

(蕭) 摩訶は言に訥なるも、恂恂たる長者なり。

(『南史』卷六十七 蕭摩訶伝)
これだけでは蕭摩訶(五三二―六〇四)が訥弁なのか吃音なのかが判然としないが、『陳書』の史臣評より判断が可能である。

然口訥心勁、恂恂李廣之徒歟。

(蕭摩訶) 然して口は訥なるも心は勁く、恂恂として李広の徒なるか。

(『陳書』卷三十一 史臣評)

ここでは『南史』で述べる「訥於言」を「口訥」と言い換えており、これは左思の例からも明らかなように吃音を意味しよう。また、「恂恂李廣」は前漢の李広を指し、後述のように彼も吃音が伝えられる一人である。

以上、「訥於言」を例として眺めてみるに、こと「発話の非流暢性」という特徴について、中国中古にあつては個人の性質と現在の障害とは境界が曖昧であつたと推測できる。つまり、障害によつて発話を滑らかに紡ぎ出すことのできない吃音と、性質として訥々と言葉を吐き出していく状態とは、「発話が非流暢である」という一点において同質であり、恐らく中国中古以前にはここに明確な区別はなかつたと考えられるのである。そこで、本稿では「吃」

中国中古以前の吃音(発話の非流暢性)への認識と理解

「訥」を用いた語句を直接の対象とし、まずは先秦から唐代までの出現状況を整理していきたい。⁽⁴⁾

三、出現状況に対する各時代の傾向

「発話の非流暢性」を持つ人々は各時代に確認できるが、そうした人々の登場頻度や彼らに対する周囲の態度を基準として、先秦から両漢時期、魏晋南北朝時期、唐代の三段階に区別ができる。

(1) 先秦から両漢時期

先秦から両漢時期にかけては、本稿冒頭に例示した韓非や司馬相如のほかに多くの人物を挙げることができる。まずは司馬相如と同じく吃音症状を持つ文人の代表として揚雄（前五三―一八）がいる。

爲人簡易佚蕩、口吃不能劇談、默而好深湛之思。

（揚雄） 爲人は簡易 佚蕩として、口吃なれば劇談する能はず、黙して而も好く深湛の思をなす。

（『漢書』卷八十七上 揚雄伝上）

揚雄は「口吃」のために激論を交わすことができず、沈思黙考を好んだとされる。ここには晋灼の注もあり、「或作遽、遽、疾也。口吃不能疾言（或いは遽に作る、遽は疾なり。口吃は疾言すること能はず）」と、発話の速度の問題として理解されるが、ここにはその流暢性も含まれていよう。文人を除く吃音症状がある人物の代表としては、前漢の初めに高祖劉邦の旗揚げから従った周昌（？―前一九二）がよく知られる。

昌爲人吃、又盛怒、曰「臣口不能言、然臣期期知其不可。陛下欲廢太子、臣期期不奉詔。」上欣然而笑。卽罷。呂后側耳於東箱聽、見昌、爲跪謝曰「微君、太子幾廢。」

昌は爲人は吃、又た盛んに怒りて曰く「臣の口は言ふこと能はず、然れども臣は期期と其の可ならざるを知る。陛下は太子を廢するを欲するも、臣は期期と詔を奉ぜず」と。上は欣然として笑ふ。即ち罷む。呂后耳を東箱に側だてて聴けば、昌を見て、爲に跪謝して曰く「君微かりせば、太子は幾ど廢されんとす」と。

〔漢書〕卷四十二 周昌伝

ここに見える周昌故事は発話の非流暢性を示す例の中でもやや特殊であり、具体的な吃音の症状が文字化して残されている。彼の場合は発話の途中に「期期」と音が挟まれることで表現されるが、これは現在の分類に照らすに難発に該当するものであろう。ここでは皇太子の廢嫡を目指す高祖劉邦に対して、自身が吃音であるために流暢に言葉が発せないことを断りながらも、激しい怒りでもって諫言する周昌の姿が描かれる。

武帝時、江公與董仲舒並。仲舒通五經、能持論、善屬文。江公呐於口、上使與仲舒議、不如仲舒。

武帝の時、江公は董仲舒と並ぶ。仲舒は五經に通じ、持論を能くし、善く文を属す。江公は口に訥にして、上は仲舒と議せしむるも、仲舒に如かず。

〔漢書〕卷八十八 儒林 瑕丘江公伝

前漢の武帝期に經学博士であつた瑕丘江公（生卒年未詳）も発話が流暢でなかった人物である。彼は董仲舒と並び評されたが、武帝の命のもと『春秋』に関する討論を行い、董仲舒に及ばなかつたとされる。董仲舒の「持論」と瑕丘江公の「呐於口」が対比されることから、発話の得手不得手も議論の決着に影響を与えたと推察される。こうした文人や文官だけでなく、武官の中にも同様の特徵を持つ者を見出すことができる。

廣呐口少言、與人居、則畫地爲軍陳、射闊狹以飲。專以射爲戲。

〔李〕広は呐口にして少言なれば、人と居れば、則ち地に描きて軍陳と爲し、闊狹を射て以て飲む。専ら射を以て戯れと爲す。

〔漢書〕卷五十四 李広伝

前漢の名高い將軍である李広（? 前一一九）の場合は、言葉を詰まることなく発することができずに会話が少なくなり、他者と一緒の際は地面に描き出して自己の考えを披露したとされ、これは筆談に類するものであろう。

休爲人質朴訥口、而雅有心思、精研六經、世儒無及者。

〔何〕休の爲人は質朴にして訥口、而して雅にして心思有り、六經を精研すれば、世儒の及ぶ者無し。

〔後漢書〕卷七十九下 儒林下 何休伝

中国中古以前の吃音（発話の非流暢性）への認識と理解

後漢を代表する經学者である何休（一二九—一八二）は「質朴」と併記されるため、個人の性質から流暢な発話がいづらかったのだと思われる。彼の場合は六経に対する理解が世儒を圧倒しており、『春秋公羊解詁』など『春秋』に関する書物を残していることから、著述を得意とした点で韓非や司馬相如と共通する。次の例を挙げる。

郭林宗常謂儒口訥心辯、有珪璋之質。

郭林宗常に謂えらく（劉）儒は口は訥なるも心は弁なれば、珪璋の質有り。

（『後漢書』卷六十七 党錡 劉儒伝）

後漢後期の官僚であつた劉儒（？—一六八）も発話に難があつたようである。後漢を代表する儒者であつた郭泰が劉儒を評して、発話は流暢ではないがその心の内は雄弁であり、玉器にも比すべき高尚さを備えているとする。

先秦から後漢までを範圍として「発話の非流暢性」を特徴に持つ人々を列挙したが、ここには以下の共通性が認められる。まず、周昌の例に明らかなように、吃音を含めた発話の非流暢性という身体的特質が必ずしも否定的な認識を持たれていないという点である。周昌の場合は吃りを交えた決死の諫言の後、劉邦は彼の症状を嘲笑することなく欣然として受け入れ、太子の廃嫡を撤回している。また呂后も跪謝という過分な感謝を示しており、彼らの態度からは吃りという症状を批判的に捉える意識は見えない。無論、高祖劉邦夫妻と周昌の積年の関係性あつてこそその故事ではあるが、こうした発話の非流暢性が社会生活を送る上での明らかな障害ではない点は指摘できよう。これは他の例も同様であり、韓非子は吃音ではあつたが秦への外交使節として派遣され、司馬相如もその文才でもつて武帝の宮中に侍ることができている。李広は匈奴征伐での数多の軍功が知られ、瑕丘江公も董仲舒との論戦に敗れたとはいえ、討論の場は公平に与えられている。つまり、後漢まではこうした発話の困難を伴う症状があつたとしても、それが直ちに不利には働かなかつた場合が多かつたと判断できるのである。次に指摘できるのは、こうした特質を持つ人々の多くが、文章創作を得意としていたであらう点である。これは本稿冒頭で示した韓非や司馬相如、そして揚雄や『春秋公羊解詁』を著した何休もそうであるし、劉儒も桓帝期に頻発した災異への献策として「封事十条」を上奏していることから判断できる。⁽⁵⁾

以上、先秦から後漢にかけては、発話が流暢ではない人々の多くが文武の両面において社会生活を送る上で必ず

しも不利益を被らなかつたであろうこと、そして文官の多くに著述が残されていることから、彼らの中に文章創作を得意とした人が多かったであろうこと、この二点が特徴として指摘できる。

(2) 魏晉南北朝期

各時代は連続しているため、後漢から三国へと移り変わったことで、すぐさまそれまでの特徴が消滅することはない。しかし、後漢から三国、両晋から南北朝へと時代が降の中で、発話が流暢ではないという特徴に対する社会の理解、そして自己の認識にも一定の変化があらわれてくる。以下でその過程を確認する。

爲都尉學士、以口吃、不得作幹佐。爲稻田守叢草吏。

(鄧艾は) 都尉學士と爲るも、口吃なるを以て、幹佐を作すを得ず。稻田守叢草吏と爲る。

(『三国志』魏書卷二十八 鄧艾伝)

曹魏の中後期に活躍した鄧艾(一九七―二六四)も吃音に悩まされた一人である。本伝には都尉學士に任じられるも吃音のために職務を全うできず、結果として屯田を掌る稻田守叢草吏に就いたとある。後に司馬懿に見出されたことで世に出ることができたが、その官途の最初期には吃音を理由に苦勞したことがわかる。鄧艾の吃音故事としては、本伝よりも次の『世說新語』言語篇のものがよく知られる。

鄧艾口喫、語稱「艾艾」。晉文王戲之曰「卿云「艾艾」、定是幾艾。」對曰「鳳兮鳳兮」、故是一鳳。」

鄧艾は口喫なれば、語るに「艾艾」と称す。晋の文王之に戯れて曰く「卿の「艾艾」と云へる、定めて是れ幾艾なるや」と。對へて曰く「鳳や鳳や」とあるは、故より是れ一鳳なり」と。

前節に示した周昌の「期期」と同じく實際に吃る様子を書き留めた珍しい例である。鄧艾が自らを呼ぶ際に「艾艾」と複数回発声する症状がそうであり、恐らくは現在の連発に分類される。これに対して司馬昭が、お前は「艾艾」と言うが、果たして鄧艾は何人いるのかと戯れに問いかけたところ、鄧艾は『論語』微子篇に見える狂接輿が孔子に返した歌詞を引用し、「鳳や鳳や」と唱う鳳は一羽なのだから、「艾艾」も私一人なのですと見事に切り返すという内容である。因みに、周昌故事と併せた「期期艾艾」は吃音症状を形容する成語として現在も用いられる。

中国中古以前の吃音(発話の非流暢性)への認識と理解

崔琰字季珪、清河東武城人也。少樸訥、好擊劍、尚武事。年二十三、鄉移爲正、始感激、讀論語・韓詩。至年二十九、乃結公孫方等就鄭玄受學。

崔琰字季珪、清河東武城の人なり。少きとき樸訥として、擊劍を好み、武事を尚ぶ。年二十三にして、郷移りて正と爲り、始め感激して、『論語』『韓詩』を読む。年二十九に至りて、乃ち公孫方等と結びて鄭玄に就きて学を受く。

〔三国志〕魏書卷十二 崔琰伝

後漢末に袁紹に仕え、後に曹操に降った崔琰（？～二一六）は、幼少の頃には「樸訥」で武芸を好んだが、後に『論語』『韓詩』に親しみ、僅かではあったが鄭玄にも師事したという。「樸訥」からは彼の性質的側面が強く認められるが、崔琰自身が著した「述初賦」序文には、彼自身の認識として発話に難があったことが吐露されている。

琰性頑口訥、至二十九、粗關書傳。

琰の性は頑として口訥あり、二十九に至りて、粗^ほば書伝に關る。

〔三国魏〕崔琰「述初賦」序、『芸文類聚』卷二十七 人部 行旅

崔琰は自身の性格を述べる際に「口訥」を用いるが、こうした自己認識と本伝の記載内容に鑑みるに、崔琰には一定程度の発話の非流暢性が認められたのであろう。文章が創作できかつ発話に困難を伴う点で、崔琰は前節に挙げた司馬相如や揚雄と類似する。こうした吃音に類した症状を持つ文人は魏晋南北朝期にも見られるため、以下で確認したい。西晋時期には本稿冒頭に示した左思のほかに成公綏（二三一～二七三）を挙げることができる。

成公綏口訥不能談論、嘿而内朗、人有劇問、以筆墨答之。

成公綏は口訥にして談論すること能はず、嘿^{もく}するも内は朗^{わか}るし、人の劇^{はげ}しく問ふもの有らば、筆墨以て之に答ふ。

〔張鷟〕『文子伝』、『太平御覧』卷四百六十四 人事部 一百五 訥

成公綏は自作の「天地賦」が西晋の文学活動を主導した張華によって評価された人物で、『文選』にも「嘯賦」が収められている。彼にも吃音症状があったようで、激論を交わすことが難しく、筆談で対応したとされる。更に東

晋以降の該当者を以下に挙げる。

璞好經術、博學有高才、而訥於言論、詞賦爲中興之冠。好古文奇字、妙於陰陽算曆。

(郭) 璞は經術を好み、博學にして高才有り、而して言論に訥たり、詞賦は中興の冠爲り。古文奇字を好み、陰陽算曆に妙たり。

(『晋書』卷七十二 郭璞伝)

郭璞(二七六―三二四)は本伝に「詞賦爲中興之冠」とあるように、東晋時期を代表する文人であり、『文選』にも「江賦」と「遊仙詩」七首が採られる。同時に『爾雅』や『山海經』に注釈を施したように、まさに「博學高才」の人物として知られるが、「言論に訥なり」と他者との議論の場での吃りの症状があつたことが読み取れる。

子隆在荊州、好辭賦、數集僚友、眺以文才、尤被賞愛、流連晤對、不捨日夕。……隆昌初、敕眺接北使、眺自以口訥、啓讓不當、不見許。

子隆は荊州に在り、辭賦を好み、數ば僚友を集め、眺は文才を以て、尤も賞愛せられ、流連晤對、日夕を捨かず。……隆昌初、眺に敕して北使を接がしむるに、眺自ら口訥なるを以て、啓讓して当たらずとすも、許されず。

(『南齊書』卷四十七 謝眺伝)

謝眺(四六四―四九九)も『文選』に多数の詩文が採録され、謝靈運と同じく山水詩の高手として知られる。彼の場合は、北朝からの使者の応接を命じられた際に吃音を理由に辞退している。結果的に辞退は許されなかったものの、公に主張できる程度には発話の困難の症状があつたのであろう。ここで辭賦を愛好した蕭子隆によつて謝眺が賞愛を受けた点に注目したい。ここからは蕭子隆が謝眺の文才の中でもとりわけ辭賦に注目していたのではないかと疑われる。『文選』を見る限り、謝眺は山水詩が中心であり辭賦作品の収録はない。しかし、実際には多くの賦作を残しており、しかも他者からの依頼に応じるかたちでの作品が多い。こうした点から、謝眺にも高水準での賦作能力が備わっていたと看做してよい。何故敢えて賦作を注視するかは、本稿冒頭にも指摘したように、吃音症状を持つとされる文人の多くに賦作が残されており、ここに何らかの因果関係があるのではないかと考えるためである。

中国中古以前の吃音(発話の非流暢性)への認識と理解

る。そして、こうした傾向は北朝の文人にも僅かではあるが確認することができる。

雅嘗論允曰「……余與高子遊處四十年矣、……高子内文明而外柔弱、其言呐呐不能出口、余常呼爲「文子」」。 (游 雅嘗て (高) 允を論じて曰く「……余 高子と遊処すること四十年、……高子内は文明にして外は柔弱、其の言は呐呐として口より出づる能はず、余は常に呼びて「文子」と為す」と。

〔魏書〕卷四十八 高允伝

北魏の頃に活動した高允 (三九〇～四八七) は、崔浩とともに北魏を支えた漢人士大夫の一人である。四十年来の交流があった游雅による高允評には、言葉は「呐呐」としていたと、発話がさほど流暢でなかったことを述べる。ここで高允を取り上げたのも、彼が発話の困難を抱えるだけでなく、「代都賦」や「鹿苑賦」のように賦作をも残しているためである。彼は政治家としての貢献も多く、吃りの症状は恐らくは軽微だったのではないかと思われるが、ともかく司馬相如や揚雄と類似する特質を持つ人物が魏晋期以降にも一定数いることが確認できる。では、こうした文章創作に秀でた文人以外での発話の非流暢性を持つ人々はどれほどいたのか。

義之幼訥於言、人未之奇。年十三、嘗謁周顗、顗察而異之。……及長、辯贍、以骨鯁稱、尤善隸書、爲古今之冠。

(王) 義之幼くして言に訥たり、人未だ之を奇とせず。年十三、嘗て周顗に謁するに、顗察て之を異とす。……長ずるに及びて、辯は贍かにして、骨鯁たるを以て称せらる、尤も隸書を善くし、古今の冠爲り。

〔晋書〕卷八十 王羲之伝

王羲之 (三〇三～三六一) は書家として知られることは言うまでもないが、幼少期は吃音だったようである。これを理由としてか周囲から才能が認められず、成長後の様子として弁舌の巧みさが示される。現代医学が指す発達性吃音は成長過程で約八割が自然治癒するとされるが、王羲之の症状もこれに該当するのであろう。

國子祭酒沈約・吏部郎謝朓嘗於吏部省中賓友俱集、各問慰祖地理中所不悉十餘事、慰祖口吃、無華辭、而酬據精悉、一座稱服之。朓歎曰「假使班馬復生、無以過此。」

國子祭酒沈約・吏部郎謝朓嘗て吏部省中に賓友と俱に集ひ、各の (崔) 慰祖に地理中の悉ならざる所十余事を問ふ。慰祖は口吃にして、華辭無きも、而も酬撫は精悉たり、一座は之に称服す。(謝) 朓は歎じて曰く

「仮使 班馬の復た生まるるも、以て此に過ぐる事無からん」と。

〔南齊書〕卷五十二 崔慰祖伝

南齊時期に官僚として活動した崔慰祖（四六五―四九九）についての故事である。沈約と謝朓が吏部省内で友人らと崔慰祖に地理の内容を尋ねたところ、そのすべてに精緻な回答をしたために一座の嘆服を得たという内容である。その際の崔慰祖の性質として発話に困難があり、華麗な修辞を用いた返答ができなかったと説明が加えられる。ここで自ら吃音の症状を持った謝朓が崔慰祖に対して激賞するのは興味深い。次は同一氏族内での例である。

柔盡心溫清、亦同己親。宗族歎重之。性聰敏、好學、未弱冠、解屬文、但口吃不能持論。

（盧 柔は尽心溫清にして、亦た己が親と同じくす。宗族歎じて之を重んず。性は聰敏にして、學を好み、未だ弱冠ならずして、文を属するを解すも、但だ口吃なれば論を持す能はず。

〔周書〕卷三十二 盧柔伝

楚少有才學、鯁急口吃、言語澀難。

（盧 楚は少くして才學有り、鯁急にして口吃あり、言語は澁難なり。

〔隋書〕卷七十一 盧楚伝

前者は北周の盧柔（生卒年未詳）であり、後者は隋の盧楚（？―六一八）である。盧柔は吃音を原因に議論が不得手であったとされ、盧楚は発話の困難さが重度であったと推測される。ここで彼らを併記したのは、彼らがいづれも范陽盧氏の出身であり、吃音が発症する原因として遺伝的要素が認められるためである。先の王羲之の例と同じく、現代医学からの裏付けが可能である点は面白い。また、ここに挙げた人々は、瑯琊王氏・清河崔氏・范陽盧氏といずれも南朝貴族層に位置し、謝朓が陳郡陽夏謝氏であることも含めて、特徴の一つとして指摘してよい。

以上、魏晋南北朝期に発話の非流暢性の特徴を持つ人々を列挙してきたが、中には左思や郭璞といった文人もいれば、謝朓に激賞された崔慰祖がいるように、一見すると社会生活を送る上での不利益を被っていないようでもあり、この点で両漢以前との差違は明確ではない。しかし、実際には社会生活上の不利は徐々に顕在化しており、その一端は本節冒頭に示した鄧艾の例からも推察できる。鄧艾と司馬昭のやりとりは親しい間柄での軽い冗談であっ

中国中古以前の吃音（発話の非流暢性）への認識と理解

たかもしれないが、『世説新語』が編まれた劉宋時期にこの故事が吃音を嘲笑する文脈で理解されたであろう点は注目する。^⑨こうした発話の困難さに対する嘲りの傾向は他にも確認できる。

偉性吃、少時嘗逐鹿於野、失之、遇牧豎而問焉。牧豎答之、其言亦吃。偉怒、謂其効己、遂射殺之。其忍暴如此。

(鄭)偉は性は吃あり、少き時嘗て鹿を野に逐ひて、之を失ふ。牧豎に遇へば焉に問ふ。牧豎之に答ふるも、其の言も亦た吃なり。偉怒りて、其の己に効ふを謂ひて、遂に之を射殺す。其の忍暴なること此の如し。

〔周書〕卷三十六 鄭偉伝

北周の時期に主に武将として仕えた鄭偉(五一五―五七一)も吃音の症状があった。若い頃に鹿狩りに出たが獲物を見失ったために牧童に問うたところ、牧童が吃音をまねて回答したために逆上して射殺したとされる。本伝では鄭偉の残虐性に注目するが、ここでは次の二点に注意したい。まず、鄭偉が吃音を自らの欠点と認識していたであろうことで、これは彼の怒りのきっかけが牧童による吃音のまねにあることから判断できる。そして、こうした発話の非流暢性が社会全体の中で嘲笑や侮蔑の対象であったであろうことであり、牧童の反応は子供の無邪気さからかもしれないが、鄭偉の怒りの発端であることを踏まえれば、吃音を侮蔑する風潮がなかったとは言い切れない。魏晉期以降、発話の流暢性に対する社会の認識が当事者にとつての欠点と看做されるよう変化した可能性は、先述した西晉の左思の例からも推測できる。左思の場合は「貌寝、口訥」と彼自身の容貌の醜さと併置されて吃音が挙げられ、これは魏晉期以降にも類似例が確認できる。

度容貌壯醜、皮膚若漆、質直木訥、口不能出言。

(焦)度は容貌壯醜、皮膚は漆の若く、質直木訥にして、口は言を出だす能はず。

〔南史〕卷四十六 焦度伝

劉宋から南齊時期の武将である焦度(四二三―四八三)について、その容貌は醜悪で、皮膚も漆のように黒かったという。彼の木訥な性格と発話に困難があったことが列挙されるが、これは左思の様子の描き方と同質である。

君信弟君彦、容貌短小、言辭澁訥、少有才學。

(祖)君信の弟君彦、容貌は短小、言辭は澁訥なるも、少くして才學有り。

〔北齊書〕卷三十九 祖君彥伝）
隋代に主に文書官として活動した祖君彥（？～六一八）も先の例と同じく、容貌との対比で発話の困難が指摘される。「洪訥」とあるからにはかなり重度の吃りがあったのであろう。こうした容貌と吃音を並べ置く傾向は、当事者の意識下にも存在していたようである。

洪之爲人也、而駢野、性鈍口訥、形貌醜陋、而終不辯自矜飾也。

〔葛〕 洪の爲人たるや、駢野にして、性は鈍く口は訥、形貌は醜陋にして、終に自らの矜飾を弁ぜざるなり。

〔抱朴子〕自叙篇）

葛洪（二八三？～三六三？）は『抱朴子』自叙篇で愚昧で粗野だと自らを卑下した上で、性格も遅鈍で発話も流暢ではなく、容姿も醜く卑しいと述べる。これは謙遜の可能性もあるが、仮にそうだとした場合でも醜い容貌と併置することからは発話の困難が欠点だと社会的に認識されていた可能性は高い。このことは次の例からも窺える。

孫盛曰、聞之長老、魏明帝天姿秀出、立髮垂地、口吃少言、而沈毅好斷。

孫盛曰く、之を長老に聞くに、魏明帝は天姿秀出し、髪は立ちて地に垂る、口吃にして少言なるも、沈毅にして好く断ず。

〔三國志〕魏書卷三 明帝紀 裴松之注引孫盛書）

明帝曹叡の外貌と性質が長老からの伝聞で記録された部分であるが、曹叡の優れた容貌と対置するかたちで吃音の症状が挙げられる。ここで注意したいのが、曹叡の吃音の症状が陳寿が著した『三國志』明帝紀本文には見えず、裴松之注にのみ見えるという事実である。孫盛（三〇二～三七三）は東晋時期の人であるので、彼の著作を陳寿が見ることは叶わなかったが、明帝に関する情報は持ち合わせていたと推測される。となれば、情報の選択には陳寿の意識が介在したことになる、ここで「口吃少言」を採らなかつたのは、これを明帝を評するのに相応しくないと陳寿が判断したと考えることも可能である。つまり、西晋の頃には既に発話が流暢でないことを好ましくないとする風潮が醸成されつつあり、そのために陳寿も『三國志』中に敢えて採らなかつたと推察できるのである。

以上、魏晋南北朝までの状況を総括すれば、発話に困難を抱える人々は一定数を挙げることができ、中には左思

中国中古以前の吃音（発話の非流暢性）への認識と理解

や郭璞、謝朓のように詩賦の創作に優れ、また葛洪のように著述を得意とした者も多く、この点は後漢までと共通する。一方、彼らに対する理解や自己認識は徐々に欠点と看做され、嘲笑や侮蔑の対象と変化しつつあった。このことは、発話に困難があった人々に貴族層出身者が多かったことから傍証されよう。すなわち、貴族の出であったからこそ発話の非流暢さという欠点があっても社会生活を送ることができたと考えることができるのである。無論、そうではない人々もいるが、貴族制が確立していったこの時期の一つの特徴としてこうした変化を捉えることは可能であろうし、この点は後漢までと明らかに状況が異なると判断して差し支えない。

(3) 唐代

唐代については、魏晉南北朝期までと比較した場合、「発話の非流暢性」を特徴とする人物の登場が極端に減少するという点が指摘できる。該当する者は『茶経』の執筆で知られる陸羽(七三三?～八〇四?)がいる。

貌倪陋、口吃而辯。

(陸羽) 貌は倪陋にして、口吃なるも弁なり。

陸羽についても魏晉南北朝までの例と同じく、風采の上がらない容貌と吃音とが併置されている。また、こうした特質が当時にさほど好まれなかったであろう可能性を示すものとして次の例を挙げる。

丘訥於言、所白奏帝多不喜、改太子賓客、襲父封。

(王) 丘は言に訥にして、白する所の奏は帝多く喜ばず、太子賓客に改め、父の封を襲ふ。

(『新唐書』卷一百二十九 王丘伝)

盛唐の頃に官僚として活動した王丘(??七四三)であるが、発話に困難があったためか、彼が上奏する場合は皇帝の意に合わないことが多く、そのためか太子賓客の職に遷されたところ。王丘はそれ以前には職歴を重ねており、発話の困難が直ちに不利益をもたらしたということとはなからうが、必ずしも歓迎されたわけではないことは指摘できよう。こうした発話の困難が唐代において明らかな欠点として捉えられたであろう例を次に挙げる。

帝外晦而内朗、嚴重寡言、視瞻特異、幼時宮中以爲不慧。十餘歲時、遇重疾沈綴、忽有光輝燭身、蹶然而興、正身拱揖、如對臣僚。乳媼以爲心疾、穆宗視之、撫其背曰「此吾家英物、非心懣也。」賜以玉如意・御馬・金帶。常夢乘龍昇天、言之於鄭后、乃曰「此不宜人知者、幸勿復言。」歷大和・會昌朝、僉事韜晦、羣居游處、未嘗有言。

帝は外は晦く内は朗らかなるも、嚴重なる寡言にして、視瞻も特だ異なれり、幼時に宮中以て不慧と爲す。十余歳の時、重疾に遇ひて沈綴し、忽ち光輝の身を燭すること有り、蹶然として興きて、身を正して拱揖すること、臣僚に対するが如し。乳媼以て心疾と爲し、穆宗之を視て、其の背を撫して曰く「此れ我が家の英物なり、心の懣ること非ざるなり」と。賜ふに玉如意・御馬・金帶を以てす。常て龍に乗り天に昇るを夢み、之を鄭后に言へば、乃ち曰く「此れ宜しく人の知るべき者に非ず、幸ひに復た言ふこと勿れ」と。大和・會昌朝を歴て、僉よ韜晦することを事とし、群居游處にて、未だ嘗て言ふこと有らず。

〔旧唐書〕卷十八下 宣宗本紀

これは中晩唐期の宣帝李忱（在位八四七―八五九）について、ここでは「吃」や「訥」ではなく「寡言」を用いるが、幼い頃は極度の口数の少なさと視線の異常があったと書かれ、これは現在一般には吃音と斜視の症状があったものと認識されることが多い。ここで注意すべきは、こうした症状によって幼児期の李忱は「不慧」と看做されていた点であり、ここからは吃音や斜視といった症状が明確に身体的欠点と認識されていたことがわかる。但し、宣宗の吃音そのものは幼児期特有のもので十歳を過ぎた頃に改善したようで、これは王羲之とも共通する。次に注目すべきは、宣宗の夢見の内容を母の鄭后に伝えたところ口外を禁止され、その後の大和・會昌年間に一言も発することがなかったという点である。これは幼少期からの吃音の症状とは異なり、宣宗自身が自覚的に発話しなかったことを示すが、十歳頃を境に症状が解消した後もまだ症状があったかのように装っていたと理解することができるのである。ここからは宣宗による皇族間の争いから身を避ける処世術でもあったと言え、唐代においては吃音症状が社会的活動を行う際に欠点と看做される可能性が非常に高かったのではないかと思われる。

以上、これまでの整理を通じて、先秦から唐代までを範囲として、発話の非流暢性を備えた人々の出現状況を概

括したが、こうした症状が社会の中で欠点や不利益になると看做されるようになった過程が読み取れよう。紙幅の都合もあり、こうした認識の変遷の背景は論じられなかったが、ここには魏晋期以降の貴族制の発達や隋唐期以降の科挙制度の実施などの社会制度の変化が影響したことは疑いない。また、こうした人々の中に文章創作を得意とした者も多く、こと辞賦に限った際に晋代以前に集中した背景には、当時の辞賦作品の創作と受容の在り方、そして文章の創作を学ぶための具体的方法が強く影響したと考えているが、これらは稿を改めて論じたい。

注

- (1) 韓非子については、彼の吃音の有無を論じたものに飯塚由樹「韓非吃音考」(『東京情報大学研究紀要』第五卷二号、二〇〇一年)がある。また司馬相如と揚雄の吃音については、谷口洋「揚雄「口吃」与模擬前人——詩論文学書面化与其影響」(『辞賦研究論文集——第五届国际辞赋研讨会』、中国文史出版社、二〇〇三年)、同「相如口吃而善著書」——詩論西漢以前の弁論与文学」(『廿一世紀漢魏六朝文学新視角——康達維教授花甲紀念論文集』、天津出版社、二〇〇三年)、同「口吃と消渴——司馬相如の後半生にみる著述と病の語られ方——」(『桃の会論集』六集、小南一郎先生古稀紀念論集、二〇一三年)があり、吃音と文学との関わりを論じたほぼ唯一のものである。中国の研究は更に乏しく、劉明「揚雄的「口吃」」(『光明日報』二〇二二年八月二十六日十六版)が管見の限り確認できたすべてとなる。
- (2) 吃音の定義については、日本医療研究開発機構(AMED)の研究開発課題「発達性吃音の最新治療法の開発と実践に基づいたガイドライン作成」(研究開発代表者・森浩一)による「幼児吃音臨床ガイドライン(第1版)」(二〇二一年)及び菊池良和「エビデンスに基づいた吃音支援入門」(学苑社、二〇一二年)を参照した。当該ガイドラインには吃音の定義のほか、その原因や特徴、介入方法なども記載され、その理解に多く参考になった。
- (3) 興膳宏編『六朝詩人伝』(大修館書店、二〇〇〇年)の「左思」の項では「口はどもりであったが」とある。
- (4) 「発話の非流暢性」を特徴に持つ人々の一覧を論文内に示すこと、及び宋代以降の状況についての整理は必要ではあるが、紙幅の都合で限界があったため、また別の方法での整理公開を考えている。

(5) 『後漢書』卷六十七 党錮 劉儒伝に「桓帝時、數有災異、下策博求直言、儒上封事十條、極言得失、辭甚忠切。帝不能納、出為任城相（桓帝の時、數は災異有り、下策して博く直言を求め、儒は封事十條を上り、得失を極言し、辭は甚だ忠切なり。帝は納るる能はず、出でて任城の相と為る）」とある。

(6) 『文士伝』の内容に虚偽妄作が多いことやその編者の問題については、松浦崇「張鷟『文士伝』について」（『中国文学論集』第七号、一九七八年）に詳しい。なお、仮に虚偽であったとしても、そこには辭賦の創作を得意とした成公綏と「発話の非流暢性」とを結びつける何らかの背景があったと推測することは可能であるため、本稿の論旨に違うものではないと考える。

(7) 前掲注（3）興膳書の「郭璞」項には「訥弁であつたが」とあり、同「謝朓」項には「朓は口下手を理由に」とあり、同「王羲之」項には「子どもころ口べたで」とそれぞれ確認できる。左思の場合とは異なり、個人の性質としての側面を重視した訳となっている。

(8) 例えば、謝朓の賦作として『全齊文』卷二十七には九篇が残され、中には「杜若賦奉隋王教於坐獻」のように他者（隋王は蕭子隆を指す）からの要請で創作された作品が四篇ある。

(9) 井波律子『世說新語』（東洋文庫、平凡社、二〇一三年）で、「この癖をタネにして司馬文王（司馬昭）がからかったのは、なかなか意味深長である。というのは「艾」には卑しい雑草とされる「ヨモギ」という意味もあり、したがって鄧艾がどもって艾が艾がといえ、みずからその卑しさを強調したことになってしまふ。しかし、鄧艾はこの意地の悪い挑戦に少しもひるまず、得たりや応と『論語』微子篇の一節をとりあげ反論する。連呼の先例のなから、鳳というもつともすぐれた素材を扱ったものを提示し、文王にしまつて返しをくわせるのである」と、当時の吃音に対する理解の様子を説明する。

(10) 『南齊書』卷三十焦度伝に「見度身形黑壯（度の身形を見れば黒壯）」とある。

(11) 『三国志』魏書卷三明帝紀の陳寿評に「評曰、明帝沈毅斷識、任心而行、蓋有君人之至概焉（評に曰く、明帝は沈毅にして斷識、心に任せて行ひ、蓋し君人の至概有り）」と、孫盛が長老から見聞いた明帝評價と共通する部分がある。